

『終わらない異世界』

山岡 凛々

奏多^{かなた}は、いつものように学校から帰って自分の部屋でくつろいでいた。最近、彼は学校や家庭でのプレッシャーに押しつぶされそうになっていて、心のどこかで現実から逃げ出したいと思っていた。そんな気持ちがあふと頭をよぎったとき、突然周りが暗くなった。

気がつくと、彼はまったく見知らぬ場所に立っていた。目の前には、古びた図書館が広がっている。天井まで届く巨大な本棚がいくつも並び、薄暗い照明がところどころに灯っている。空気は冷たく、かすかに古い紙と埃の匂いが漂っていた。周囲には人影がまったく見えないが、何かが動いているような気配だけが感じられる。微かな風に乗って、どこかでページがめくられる音が響いていた。

奏多は、不安を抱えながらも、ゆつくりと本棚の間を歩き始めた。棚の中には無数の本が詰め込まれており、足元にも多くの本が乱雑に落ちている。その中には、色鮮やかな装丁のものや、使い込まれたような革のカバーで覆われたもの、奇妙な形をした本など、さまざまな本があった。しかし、なぜか奏多の目は一冊の古びた本に引き寄せられた。

その本には「終わらない世界」と題されていた。他の本よりもずっと目立たない装丁で、ところどころ擦り切れているが、どういうわけかそ

の本だけが彼の心を引きつけていた。まるでその本が「ここにきてほしい」と彼に呼びかけているかのように感じた。

奏多はその本に手を伸ばし、好奇心に駆られて拾い上げた。指先に本の温もりが伝わり、不思議な感覚に誘われるようにしてページを開いてみると、そこには何も書かれていない真っ白なページが広がっていた。しかし、次の瞬間、ページから眩しい光が溢れ出し、奏多の体を包み込んだ。

光が収まり、再び目を開けた奏多は、霧に包まれた森の中に立っていた。視界がほとんど効かず、どこにいてもわからない。しばらく歩いていると、小さな村にたどり着いたが、村はひっそりとしていて、人の気配がまったく感じられない。

村を探索していると、古びた井戸の前で一人の少女に出会った。彼女は無表情で立っていて、何かを考え込んでいるようだった。

「ここは『迷いの森』。この森に迷い込んだ人は、二度と出られないって言われている」

少女の言葉を聞いて、奏多は不安になったが、彼女と話をしているうちに、どこかで彼女と会ったことがあるような気がしてきた。

「君も、ここから出たいと思ってるの？」

奏多の問いに、少女は静かにうなずいた。奏多は彼女と一緒に森を抜け出す方法を探すことにした。

奏多と少女は、森の中を何度も歩き回ったが、どうしても同じ場所に戻ってきてしまわう。

まるで迷路に迷い込んだかのように、出口は見つからない。奏多は、ここはただの森ではなく、自分の心が映し出されているかもしれないと感じ始めた。

「この森は、もしかして僕の心の中にある迷いを映してるんじゃないのか…？」

そう思い始めた奏多は、過去に選ばなかった道や後悔していることを思い返した。選ばなかった道が、今の自分を迷わせているのかもしれない。

奏多が自分の心と向き合い始めると、霧が少しずつ晴れて、森の出口が見えてきた。彼と少女は出口に向かって進んだが、出口の手前で少女が立ち止まった。

「ここで私はおしまい。あとは、あなたが自分の力で進んで」

奏多は少女に別れを告げると、少しの間立ち止まり、次の道へと静かに歩き出した。森を抜けた奏多が次にたどり着いたのは、「炎の山」だった。山全体が燃え盛る炎に包まれ、熱気が彼を襲う。奏多は、暑さに耐えながら山を登り続けたが、次第に心の中で抑えていた怒りや苛立ちが湧き上がってくるのを感じた。

現実世界でのストレスやプレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、それにも誰にも打ち明けられず、ただ耐え続けてきたことへの怒り。自分の本音を抑え込み、我慢を重ねることで蓄積した不満。それらの感情が、この炎となって彼の前に立ち上がった。だかつていた。

すると突然、巨大な精霊が現れ、奏多の前に立ちはだかった。その精霊は、燃え盛る炎のごとく、彼の中で抑え込まれていた怒りや不満そのものが具現化した存在だった。

「お前の心には、まだ燃え続ける怒りがある。それがこの山の炎となっているんだ」精霊の言葉に驚いた奏多だったが、すぐにその言葉の意味を理解した。この精霊との戦いは、彼が自分の内面の感情と向き合い、それを乗り越えるための試練だったのだ。

精霊との激しい戦いを通じて、奏多は自分が抑え込んできた感情、そして現実に対する不満や苛立ちと向き合った。最終的に、奏多はその感情を受け入れ、手放すことを決意した。その瞬間、山の炎が静まり、精霊は消えていった。奏多は疲れながらも、次の道に進むことを決めた。

山を越えた奏多は、静かな湖のほとりにたどり着いた。湖は透き通っていて、鏡のように水面には彼の姿が映っていた。しかし、そこに映る自分の姿はどこか違和感があった。まるで、もう一人の自分が湖の中からこちらを見つめ返しているような感覚だった。

奏多は不安を感じながらも、その水面に映る自分の姿をじっと見つめた。その時、湖のほとりに小さな金色のカギが置かれていることに気づいた。奏多はそのカギを手

に取ると、先へ進むために必要なものだと感じた。そして彼は湖を後にして、次の試験に向かう決意を固めた。

奏多はついに「終わりの扉」の前にたどり着いた。この扉を開けば、現実世界に戻るはずだと信じていた。しかし、その前にもう一つ試験が待っていた。

扉の前には、もう一人の奏多が立っていた。冷たい目で奏多を見つめ、静かに言った。

「本当にこの扉を開ける覚悟があるのか？お前はまだ、自分の心の中の本当の気持ちと向き合っていない」

もう一人の奏多は、彼の中にある不安や恐れ、そして後悔のすべてを象徴していた。彼との対話が、奏多にとって最後の試験だった。

二人の奏多は、お互いの思いをぶつけ合った。もう一人の奏多は、現実と向き合うことから逃げ続けていることを非難した。それに対し、奏多は、現実に戻ることが怖いという自分の正直な気持ちを打ち明けた。「どうしても、現実に戻ることがこんなにも怖いだろう…」

現実に戻れば、また同じ苦しみが待っているかもしれないという恐れが、奏多の心を支配していた。しかし、それを避けていては、自分が本当に進むべき道を見つけないとできないという葛藤が、奏多の中で交差した。

最終的に奏多は現実と向き合う覚悟を決めた。自分の弱さや恐れを認めつつ、それでも前に進む意志を持つことで、彼はもう一人の自分と和解した。

奏多は心の力ギを使って扉を開いた。その瞬間、光があふれ、奏多の体を包み込んだ。

奏多は目を覚ますと、自分の部屋のベットのの上にいた。すべてが夢だったのかもしれない。しかし、手には確かに「心の力ギ」が握られていた。

「あれ？なんでこの力ギが…？」

彼は窓の外を見る。そこで彼は、一瞬だけ異世界で出会った少女の姿を見たような気がした。しかし、その姿はすぐに消え、何事もなかったかのように風が吹き抜けた。

何もかもがいつも通りのはず。見慣れた部屋、変わらない景色、すべてが元の場所にあるように見える。奏多は安心したように息をつき、そのまま部屋を見渡した。何かが少し違っているとしても、奏多がそれに気づくことはない。

ただ、その力ギだけが、彼に何かを伝えたがっているようだった。